

Successive Voices

takashiishimoto

Successive Voices

江戸の荘屋から始まって、4代続いた政治家（34）が言った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」 何かを言っていた。

よく響く明瞭な言葉で。

「それはいい！」 僕は即座に同意した。

いつものように、グジグジ悩まずに。

おそらく4代続いている、腹から響かせる柔らかで強い声。

僕は彼が、僕の小説の登場人物だったらよいのに、と思った。

革張りのソファがある、1杯1000円以上するコーヒーを前にして
重要な話が終わった後に、ちゃんと僕のつまらない話を引き出そうとしている。

年と言えば、下から2番目の保守派の国会議員が

2階から、真夏の陽が差す銀座4丁目の交差点を眺めながら

「辻立ちしなきゃな・・・」と

僕の頭のコンピューターが、例によって答えを探してスタックしている間に
ポツリと言った。